



Newsletter

No. 21 March 31 2016

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

Historia de un Oso ある熊の物語

先日、世界的にも有名な映画賞オスカー短編アニメーション部門にてチリ史上初の受賞という快挙を遂げました。チリではこの受賞に対し大きな盛り上がりを見せていますが、一方華々しい受賞の陰には様々な物議をよんでいます。

この物語は、家族とともに幸せに暮らす熊がある日何者かによって捕らえられ、家族から引き離された上にサーカスの熊として生きることを強要され、最終的には家族に会いたい一心で命からがらサーカス団から逃げ出す様子が描かれています。チリ人、ガブリエル・オソリオ監督による脚本で、1973年チリがピノチエト軍事政権下におかれた際、社会主義政権を支持する反ピノチエト派であった彼の祖父が逮捕され2年間の収監の後イギリスに亡命したという経験がこの映画に投影されています。チリではサッカーの話題、宗教の話題、政治の話題は慎重にと言われるほど若い世代も含め政治の話になると議論が熱くなるのが往々にしてあります。それ故今回の受賞はそれぞれの視点でその当時の混乱と悪夢を思い起こさせ大きな影響を与えたといえるでしょう。監督のインタビューで『この作品を見てくれた人が、愛する人の事や、自分の人生においてその人たちがどんな大切な存在か気づいてくれることを期待します。』と述べているように政治の派閥を問わずチリ人の家族を大切に国民性が垣間見える作品でもあります。現在、豊かで平和なチリですが、わずか43年前に起きたチリの悲しい歴史は、未だチリの人々の心の奥底に刻まれているように思われます。

ニュースレター第21号ではジョイント・ディグリープログラムとPRENECに関する最新情報を中心にお届けいたします。

小田柿 智之 LACRC 消化器病態学分野



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



第88回オスカー受賞の様子



映画の一コマより

Contents

- ご挨拶 1
- JDプログラム 2
- PRENECの進捗状況 3
- 活動報告 5

ジョイント・ディグリープログラム

国立大学法人東京医科歯科大学(TMDU)は、海外の大学と連携し共同で大学院教育を行い、連名で一つの学位を授与するジョイント・ディグリー・プログラム(以下JDP)を開設します。このプログラムは、文部科学省により平成27年6月15日に日本で初めて設置が認められました。平成28年4月からチリ大学(UCh)と本学大学院博士課程においてこのプログラムに関する専攻を立ち上げ、学生の受入れを開始いたします。本号ではチリにおけるJDPの進捗状況を報告いたします。

平成28年度学生決定

本年1月、TMDU・UCh合同の学術委員会による審査のもとJDP一期生となる平成28年度の入学試験が行われ、チリ人医師の入学が決定しました。以下に、記念すべき一期生としてディエゴ・サモラーノ・ヴァレンスエラ医師の志願書の一部を抜粋して掲載します。

“ディエゴ・サモラーノ・ヴァレンスエラと申します。

一般外科専門医を取得後、現在、クリニカ・ラス・コンデス(CLIC)の大腸肛門科にて特別研究員として研究活動を行っております。この場をお借りしてこのプログラムへの志望理由を述べさせていただきます。

第一にこのプログラムは、私が関心を持っている大腸肛門科分野の研究に取り組むだけでなく、大腸肛門科専門医取得のための研修も継続できる点にあります。

すなわち、優れた学術機関であるチリ大学においてサブスペシャリティ領域(私の場合、大腸肛門科領域)の臨床研修を受けながら、研究活動に焦点を当てた博士課程プログラムを受講できるという利点があります。このプログラムから多くを学び、将来的には、革新的な治療の開発に携わることができればと考えております。

また、チリ大学・東京医科歯科大学ともに伝統のある優れた学術機関であることも志望理由の一つです。

チリ大学は確立されたサブスペシャリティ領域のプログラムがあり、質の高い専門家教育の歴史があります。さらに、臨床教育の場であるCLICは、チリ国内の治療や研究においてパイオニア的な存在です。

東京医科歯科大学も特に大腸肛門科の分野における治療知識や専門技術においては国のトップに位置し、世界において中心的な教育機関として認められています。

《中略》

最後になりますがこのプロジェクトを通して、臨床及び研究の両面から多くを学ぶことは医師として成長するこの上ない機会だと確信しております。”



ディエゴ・サモラーノ・ヴァレンスエラ医師

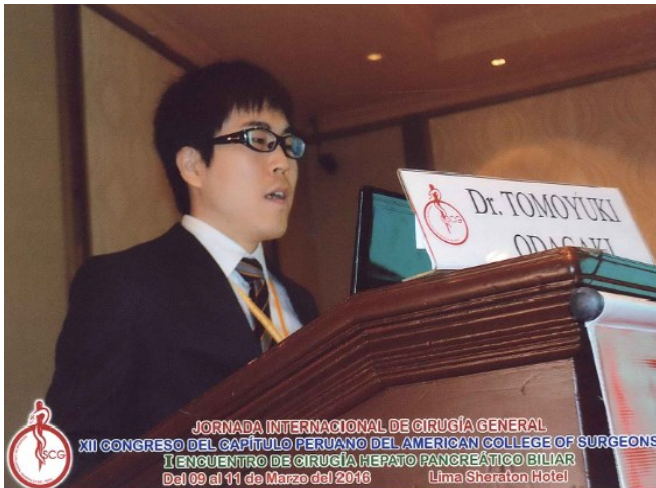
2009年デサロジョ大学医学部卒業後、2010年～2014年に修士課程「デサロジョ大学アレマナ病院ーパドレウルタード病院一般外科プログラム」にて一般外科プログラムを修了し、2015年CLIC大腸肛門科の特別研究員として現在に至る。

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。現在、プンタ・アレーナス、バルバライソ、サンティアゴの3都市において免疫学的便潜血反応検査(iFOBT)を用いた検診プログラムが進行しております。昨年11月に正式なPRENEC参加の協定を結んだチリ国立がん研究所(サンティアゴ)とグラント・ペナビント病院(コンセプション)に加え、参加の見込まれているバルディビア、コピアポ、アントファガスタの各病院を対象にPRENEC導入に向けた具体的な手続きを含む講習会が近日中に予定されております。

また国内にとどまらずペルーやコロンビアへのPRENECの普及活動も行われており、本号ではその様子をお伝えいたします。

ペルー国際外科学会発表及び病院視察



国際外科学会で発表を行う小田柿助教

本年3月9日～11日に第12回国際外科学会(American College of Surgeons ペルー支部)がペルーの首都リマにて開催されました。

この学会にアメリカ、ブラジル、アルゼンチン、ベネズエラの医師と並び、CLCからロペス医師、ボンセ看護師、レイエス医師、ウリベ医師、LACRCから小田柿助教が招聘されました。

ロペス医師は「大腸癌早期診断プログラム」、ボンセ看護師は「PRENECのチーム構築」の発表を行い、小田柿助教は「早期大腸癌の内視鏡治療」及び「ESD治療」に関する発表を行いました。学会期間中にPRENECに興味を持つペルー国内の国立エドガルド・レバグリアティ・マルティンス病院、及びセンテナリオ・ペルアノ・ハポネサ病院の視察を行いました。

国立エドガルド・レバグリアティ・マルティンス病院は1500床の規模を持つ国内有数の公立病院で、同院への視察の際に、小田柿助教より「早期大腸癌の内視鏡治療」に関する講演が行われました。



エドガルド・レバグリアティ・マルティンス病院



センテナリオ・ペルアノ・ハポネサ病院

第三国研修後のモニタリング出張

JICA・AGCID（国際協力庁）共催のもと昨年8月に開催された第三国研修から半年以上が経過したことで、研修後の成果等をモニタリングする目的で、LACRCからは小田柿助教、CLCからロペス医師、ポンセ看護が本年3月10日～12日に研修参加国のコロンビアへ出張しました。

コロンビアの首都、ボゴタにあるロサリオ大学医学部附属マジョール・メデリ大学病院にて、第三国研修に参加した医療チームのメンバーと同院経営幹部及び政府関係者が集まり現在のコロンビアでの進捗状況を確認するとともに、今後に向けての話し合いが行われました。

コロンビアでは現在検診プログラム導入に向けて準備を進めており、次のステップとして今年8月開催予定の第三国研修に昨年参加した医療チームの代表として更なる進捗状況を報告することが決まっています。



コロンビア病院関係者と記念撮影



ロサリオ大学医学部附属マジョール・メデリ大学病院



首都ボゴタの街並み

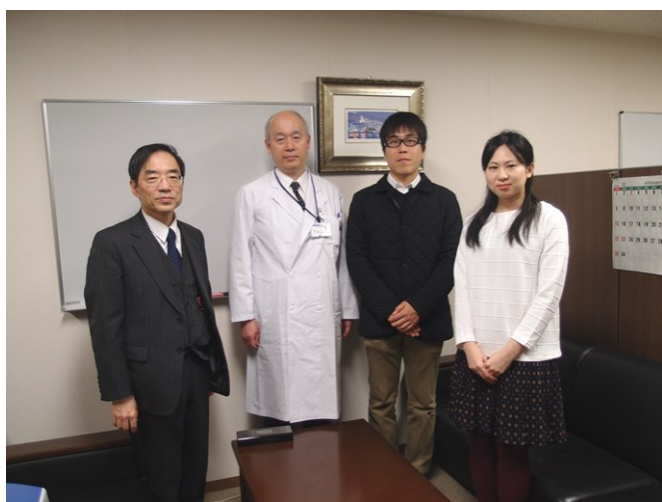


ポンセ看護師(写真中央)と昨年の第三国研修参加者

LACRC活動報告

小田柿助教、一時帰国

本年1月にLACRC小田柿助教が一時帰国した際に、本学医療・国際協力担当である田中理事とLACRC拠点運営管理者の河野副理事へ現在のLACRCの様子、PRENECの進捗状況と日本人医師の役割等を報告いたしました。また、河野副理事を中心に新たにチリ拠点の運営に参画することになった安野准教授及び過去にLACRCへ赴任された方々による小田柿助教の慰労会が開かれ大いに盛り上がりました。



左より田中理事、河野副理事、小田柿助教、山中係員



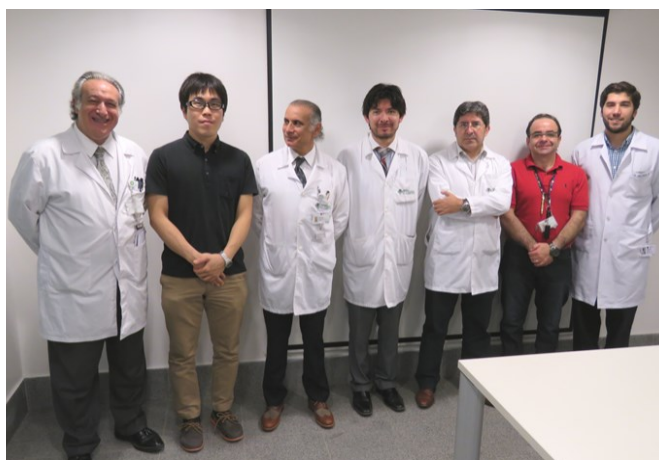
チリ拠点運営管理者ならびにLACRC関係者による慰労会の様子

エル・カルメン(マイブ)病院見学

エル・カルメン(マイブ)病院は首都州、サンティアゴの南西に位置したマイブ区にある公立病院です。マイブ区だけでなく近隣の区からも多くの患者を受け入れております。

エル・カルメン病院に勤務するCLC大腸肛門科チームのサラテ医師の要請により、小田柿助教が「PRENECにおけるチリ人医師への大腸内視鏡指導の状況」及び「大腸ESD治療」に関する講演を行いました。

参加者は同院の消化器・大腸肛門科の医師やレジデントが中心で、活発な討論がなされました。このような機会を大切にし、PRENEC活動以外でもチリの医療に貢献できればと思っております。



エル・カルメン(マイブ病院)消化器・大腸肛門科スタッフと記念撮影

LACRC新オフィス

前号編集後記でもお伝えしましたように2016年1月、CLCの外来診療部の整備目的にてLACRCオフィスはEDIFICIO AZUL 2階から地下1階へと移転となり、2010年にLACRCがCLC大腸肛門科チームとオフィスを並べ開設されて以来2度目の移動となりました。以前はCLCアカデミック部門の横に位置していましたが今回はCLC内視鏡センターの横へと構えオフィス面積も広がりました。



小田柿助教の部屋



ハイメ氏、早川氏の作業スペース



LACRCオフィス入口



大腸肛門科スタッフのデスク

編集後記

3月、バケーション後のチリは新年度、新学期の始まりです。

海外やビーチで長い休暇を過ごしていた人々がサンティアゴの街に戻り、交通機関にも影響が出るほどの混乱です。

今後もNewsletterを通じて近況を報告して参ります。より良い誌面を作成する為皆様からのご意見・ご要望がございましたら気軽にLACRCオフィスまでご連絡くださいませ。

(早川美貴)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No. 21, March 2016

[発行日] 2016年3月31日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp